

教科研究開発高度化系
人間発達探究コース 人間発達探究プログラム
専門科目：プログラム別問題

【出題の意図】

解答の形式：教育学分野、心理学分野、幼児教育分野、特別支援教育分野から1分野を選択し、選択した分野の全ての問題に解答する（配点：問1，問2とも各50点）。

〔教育学分野〕

問1 教育基本法の第14条「政治教育」と第15条「宗教教育」の2つに関する中立性について基本的理解があるか問うために出題した。その際に、してはならないこと、尊重されなければならないこと、慎重に配慮することなどを、正しく記述している場合には評価する。ただし、フランスのライシテ（教育における厳格な政教分離）など大きなテーマに発展すると説明が十分にできない可能性もあり得るので、問題文では「日本の学校教育」に限定し、道徳教育における宗教的情操などについての理解がある場合は加点する。

解答に際しては、特定の立場や事象に偏ることなく、客観的な視点から慎重に配慮して適切に採点する必要があるので、「特定の主義主張や出来事などについては対象外とするので、一方の立場や事象に偏ることなく、中立的かつ配慮ある記述を心がけるよう注意すること」と記載し、たとえ記述されていても評価の対象としない。

問2 現在、中央教育審議会では次期学習指導要領に向けた議論が進んでいるが、そこでは学習評価の在り方についても議論の主題の一つとなっている。学校教育活動の要の一つともいえる評価について基本的な知識と問題関心を持つことは、教職大学院での学修の基礎となるため、これについて問うこととした。具体的には、指導と評価の一体化、観点別評価など、現在の日本の学校教育で採用されている学習評価のあり方についての理解、その実質化や改善に向けた問題関心の深さや質などについて問うことを企図した。

〔心理学分野〕

問1 教育的支援においては心身の発達の過程や各年齢時期における発達の特徴を理解することが重要であり、特に認知発達は学習を考える上でも重要な視点となる。設問では、児童期の認知発達に関する用語を挙げさせ、それに関する知識、理解およびその学校教育への示唆についての考え方を記述させることで、入学および入学後の学修に関する適性を判断する。

問2 いじめへの対応において、教師はいじめの構造を見極めたうえでそれに応じた対応を行うことが重要である。設問では、いじめへの理解と対応を行う際の留意点について、被害者、加害者、観衆、傍観者から成り立ついじめの構造をふまえて、それぞれへの理解と対応に関する知識および考え方を記述させることで、入学および入学後の学修に関する適性を判断する。

〔幼児教育分野〕

問1 幼稚園教育要領の領域「環境」には「内容（9）日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。」という項目があるが、これは幼児を対象として単に知識や技能を教えるということの意味しない。幼稚園教育が幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであること、自発的な活動としての遊びを通した指導を中心とすることを基本としていることから、保育者には、幼児が自ら意欲的に環境に関わることを通して、数量や図形などへの関心が高まるように環境構成を工夫し、子どもの姿に応じて適時的確な援助を行うことが求められる。以上のような数量や図形などに関わる保育内容における配慮すべき点について、具体例を挙げて記述させることで、幼児教育における指導の基本的な考え方を確認し、入学および入学後の学修に関する適性を判断する。

問2 幼稚園教育は幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮し、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うことを基本としている。その中でも、海外から帰国した幼児等については、言語、生活習慣、行動様式が異なり、保護者の言語的・文化的背景や教育方針、日本での滞在期間、それまでの就園経験等、さまざまな配慮すべき事柄があることを踏まえ、指導内容や方法の工夫を組織的かつ計画的に行う必要がある。まずは、幼児が安心して園に通い、十分に自己が発揮できるよう、保育者が簡単な挨拶で幼児の母語を使用する等配慮しながら温かい関係を形成することが求められる。また、保護者に対しても丁寧な情報共有に努める等、家庭との連携も重要である。以上のような配慮すべき基本的な内容について、具体的な場面を挙げて記述させることで、幼児教育における包摂的な指導と家庭との連携に関する考え方を確認し、入学および入学後の学修に関する適性を判断する。

〔特別支援教育分野〕

問1 障害について考えるとき、障害を「個人の抱える問題」として捉えるのではなく、個人因子と環境因子の相互作用が影響して生じるという考え方がある。これは障害の「社会モデル」の考え方であり、学校現場における支援を考えるときに重要である。設問では、「社会モデル」についての知識および学校現場における指導や支援との関わりについての考えを記述させることで、入学および入学後の学修に関する適性を判断する。

問2 インクルーシブ教育を考える上で、子どもたちの多様性を前提として、すべての子どもたちが地域の学校で教育を受ける権利を保障するため、教育システムを改革していくプロセスが重要である。設問では、日本のインクルーシブ教育システムの現状とその課題と今後の方向性について論述させることで、子どもの教育を受ける権利についての認識を確認し、入学および入学後の学修に関する適性を判断する。